医療従事者における「人体標本を用いた実習」についての 調査報告(2018年度):

臨床経験年数の長短による達成度・満足度の違い、及び2017年度調査との比較

坂本宏史 1 関口賢人 1 志茂 聡 2 藤田 愛 2 成 昌學 1 境野千春 3 川手豊子 2

¹健康科学大学 健康科学部 理学療法学科 ²健康科学大学 健康科学部 作業療法学科 ³境野ファーム

A study on the needs of practical training for healthcare professionals, using anatomical specimens of human bodies in 2018

SAKAMOTO Hiroshi, SEKIGUCHI Yoshihito, SHIMO Satoshi, FUJITA Ai, SEI Syo-syo, SAKAINO Chiharu, KAWATE Toyoko

要旨

平成30年4月に開催された、健康科学大学(以下、本学)主催の医療従事者を対象とする「医療専門家のための人体解剖学講習会」(以下、解剖実習セミナーまたはセミナー)の参加者に対して、参加者の属性(職種・臨床経験年数・担当患者数・セミナー参加経験数)と、解剖実習セミナーへの必要度・達成度・指導方法およびプログラムへの満足度、改善すべき点などについて、セミナー終了時に質問紙調査を行った。

昨年度に行った質問紙調査の解析で、臨床経験の少ない集団では指導法やプログラムへの満足度が有意に低いことがわかったため、今回は指導方法やプログラムの改訂(基礎コースを設けて目的別の講習を増やした)を行い、臨床経験年数の少ない参加者への教育的配慮を行った。

結果, 臨床経験の少ない群における指導方法やプログラムに対する満足度が, 昨年度のそれより も高くなっていた。

また、上述した改訂である基礎コースを選択した参加者では、従来のコースを選択した参加者に 比べて、セミナーを通しての達成度が高い結果であった。

キーワード:解剖実習セミナー,臨床経験,解剖学の必要性

I. はじめに

健康科学大学(以下,本学)では、山梨大学医学部の協力を受け、「医療専門家のための人体解剖学講習会」(以下,セミナー)を開催してきた。このセミナーは、主に山梨県内の医療専門家を対象に、地域貢献の一環として、生涯学習(リカレント教育)の場を提供し、臨床上必要な解剖学

の知識の向上を図ることを目的に、平成16年から年に $1 \sim 2$ 回、2、3日間の会期で開催されてきた。リカレント教育、すなわち生涯に渡っての学習は、医療専門家にとっては症例を重ねるほど必要となり、特に解剖学的理解のための実習を求める声は多い。

昨年度からは, 卒後研修プログラムに位置付け

連絡先 坂本 宏史 〒401-0380 山梨県南都留郡富士河口湖町小立7187 健康科学大学 健康科学部 理学療法学科 Tel: 0555-83-5200 E-mail: sakamoto@kenkoudai.ac.jp

られ、参加者の多くが本学の卒業生となり、平均 年齢や臨床経験の平均年数が低くなった。このため、昨年度の質問紙調査の解析で、臨床経験4年 以上群と4年未満群の2群を比較したところ、臨 床経験4年未満群でセミナーの指導法・プログラ ムへの満足度が有意に低いことがわかった。そこ で我々は今年度のセミナーにおいて以下の工夫を 行った。

①臨床経験年数の少ない者が参加することを考慮し、より基礎的なコース(基礎コース)の選択肢を提供する。基礎コースでは、実習標本を上肢、下肢、頭頚部、頭頚部を除く体幹部の4か所に分け、実習指導者による実習対象の説明ののち、参加者が指導に沿って確認作業を行う。

②ニーズを具体的・量的に把握するため、昨年 (2017年) 度の質問紙⁸⁾ の自由記述部分の回答に 見られた感想・意見を基に、質問項目への答えに 具体的な選択肢をおいた。

上記に関する成果を解析するために、参加者を 臨床経験年数4年以上群と4年未満群の2群に分 類した上で、質問紙上の項目について昨年(2017 年)度との比較を行った。また、本年(2018年) 度新たに設定した基礎コースへの評価について、 従来の実習方法(発展コース)を選択した参加者 の評価と比較した。ニーズについての具体的選択 肢についても、まとめた上、検討を行った。

Ⅱ. 方法

1.対象

セミナーは卒後研修プログラムに位置付けられており、応募した参加者のほとんどはweb上の「健康科学大学卒後教育ホームページ」および、本学教員により直接案内を受けたものであり、応募者には本学の卒業生が多いことが予想された。

2. 質問紙調査(資料1)

質問紙を参加者全員に,実習資料と同時に実習 開始直前に配布し,実習についての説明の後,質 問紙による調査についての説明を行い,質問紙は セミナー終了時に回収したい旨を伝えた。

質問紙は次の項目をあきらかにすべく作成された。

- ① 参加者の属性(性別·年代·職種), 臨床経験・ 担当患者数・セミナー参加経験数
- ② 選択コース(発展コース:参加者がそれぞれの課題を解決するために、自身のペースで課題対象を実習する/ 基礎コース:実習標本を上肢、下肢、頭頚部、頭頚部を除く体幹部の4か所に分け、実習指導者による実習対象の説明ののち、参加者が指導に沿って確認作業を行う)
- ③ セミナーの必要性・達成感・指導法及びプログラム内容への満足度(ヴィジュアル・アナログスケール: VAS. を使用)
- ④ セミナーに関して、具体的な要望・指導方法 やプログラムについての希望 (選択肢を提示)

質問紙は、実習初日に配布し、実習終了日に回 収した。

3. 分析方法

参加者の属性、職種及び臨床経験年数・延べの 担当患者数・これまでのセミナー参加回数を集計 し、全体及びコース別にまとめた(2群の比較: Welchの検定)。

また各指標,①人体標本を用いた解剖学実習の必要性(必要度),② 講習会後の目的達成度,③ 指導方法(スタッフの対応)についての満足度、④ 講習会プログラム内容についての満足度について、昨年度と本年度の結果を全体で比べるとともに、「臨床経験4年以上群」・「4年未満群」という定義を使用し、それぞれについて昨年度と比較した(マン・ホイットニーのU検定)。

さらに、「基礎コース」選択群(一度でも基礎コースを選択した群)と従来のコース(「発展コース」選択群)の間に、上記の①~④における結果の違いがあるかについても比較を行った(マン・ホイットニーのU検定)。

有意水準はp < 0.05とし、検定ソフトにはエクセル統計2015を用いた。

また、設問3,5,8(複数の選択可能)で問うたニーズについての具体的選択肢の結果においても、各群の違いについて検討を行った。

資料1.〈質問紙〉

解剖学講習会にご参加いただき、ありがとうございます。

今後本講習会に参加される方々のために、この企画をさらに良く、参加しやすいものにしたいと考えております。そのための基本データを集めるため、以下のアンケートにお答えいただき、皆様のご感想・ご意見をお聞かせいただければ、大変幸いに存じます。またアンケートの集計結果は、健康科学大学紀要等で公表させていただきたいと考えております。

今回いただいた回答は、個人が特定されない形で処理され、皆様の個人情報が漏れたり、上述の目的以外に使用されたりすることはありません。この調査についてご不審や、あるいは、調査結果について興味をもたれた場合には、坂本(健康科学大学理学療法学科sakamoto@kenkoudai.ac.jp)までお問い合わせください。

| sakamo | to@kenkoudai.a | ac. jp)までお間 | 別い合わせください。 | | |
|--------|--------------------|-------------|-------------------|--------------------------|---|
| ○ご自: | 身について | | | | |
| | 別:□女性 | □男性 | | | |
| 2. 年 | 齢: 歳 | | | | |
| 3. 職 | 種:□0T | □PT □~ | この他 (|) | |
| 4. 臨 | 床経験(教育組 | 圣験): | 年か月 | | |
| 5. 1 i | 週間に診療する | 患者さんの延べ | 数名 | | |
| 6. 人 | 体を用いた解音 | 刊実習(学生時代 | 式も含む)への参加経 | E 験回 | |
| | | | | | |
| ○解剖: | 学講習会につい | いて | | | |
| 1. 本 | 講習会で選んた | ビコースについて | て(該当するものに○ |)をつけてください) | |
| 第 | 1 月 目 (4/28) | 午前: | 基礎コース | 発展コース | |
| 第 | 1 日目 (4/28) | 午後: | 基礎コース | 発展コース | |
| 第 | 2 日目 (4/29) | 午前: | 基礎コース | 発展コース | |
| 第 | 2 日目 (4/29) | 午後: | 基礎コース | 発展コース | |
| 2. 人 | 体標本を使った | 上解剖学の必要性 | 生について。下のスク | ールに「/」をつけてください。 | o |
| | | | | | |
| | 1 | | | 1 | |
| | 0 | | | 100 | |
| 1 | ほとんど感じな | 2 V | | 常に感じる | |
| 3. 本 | 港羽今に対する | く目的を凹下から | 湿しで口にチェッカ | , , してください。(複数回答 - 可) | ١ |
| | 曲自云に対する 的な運動器の様 | | 医心て口にアエック | してくたです。(後数四合一円) |) |
| | 的な脈管の構造 | | | | |
| | 的な臓器の構造 | | | | |
| | 的な結合組織の | | | | |
| | に関連する運動 | | | | |
| | に関連する構造 | | | | |
| | に関連する構造 | | | | |

| □その他 | |
|--|------------------------|
| | |
| 4. 講習会を終えて、設問3の「目的」の達成 | 度は次のどれに当たりますか。 |
| 下のスケールに「/」をつけてください | |
| | I |
| | Ţ |
| 0 | 100 |
| 達成できなかった | 達成できた |
| 5. 達成できなかったと思う場合の理由につい | ヽて以下から選んで□にチェックしてください。 |
| (複数回答 可) | |
| □標本が、わかり難かった | |
| □確認したい課題が多い | |
| □質問する機会が少なかった | |
| □準備すべき知識が足りなかった | |
| □その他 | |
| | |
| ○開催方法、実習の進め方について | |
| 6. スタッフの対応に関して。下のスケールに | 「/」をつけてください。 |
| | |
| I | l |
| 0 | 100 |
| 不満 | 満足 |
| 7. プログラムについて。下のスケールに「/」 | をつけてください。 |
| | |
| | 100 |
| 0 不満 | 100 満足 |
| *** | |
| 6. 政问 6, 7 (c. 7)(c. 成 3 9 3 安全が 80 4 いは、 | 口にノエックしてくたさい。(後数回台 刊) |
| □時間が足りない | |
| □さらに丁寧に説明してほしい | |
| □最初から解剖する機会が欲しい | |
| □もっと臨床的な講義を聴きたい | |
| □もっと基礎的な講義を聴きたい | |
| □その他 | |
| | 以上、ご協力をありがとうございました。 |

なお,本研究は,健康科学大学研究倫理委員 会による研究計画の承認(平成30年度 第1号) を得ている。

Ⅲ. 結果

参加者の属性について

質問紙は、セミナー参加者35名全員から回収された(回収率100%)。

なお、参加者の参加形態は、第1日目のみの参加が8名、第2日目のみの参加が16名、両日参加が10名であった(不明1名)。

表1に、参加者の属性をまとめた。参加者全体 (表1-1) では、職種として理学療法士 (PT) が 多く、年齢は $22歳\sim40歳$ (中央値は24歳) であった。この傾向は昨年度 $^{1)}$ と同様で、年齢的には20代が全参加者の74.3%を占めた(昨年度は84.8%)。

表 1. 参加者の属性について 表 1-1. 参加者全体 (n = 35)の属性

| | • |
|--------------------|------------------|
| 性別 (人) | 男:29, 女:6 |
| 年齢 (mean ± SD) | 26.14 ± 2.12 |
| 理学療法士(人) | 27 |
| 作業療法士(人) | 7 |
| 精神保健福祉士 | 1 |
| 経験年数(mean ± SD) | 3.51 ± 3.48 |
| 週単位の患者数(mean ± SD) | 83.53 ± 31.82 |
| 講習会参加数(mean ± SD) | 3.56 ± 1.41 |
| | |

選択コース別にみると、多くの参加者は従来型の、自ら課題を決めて自らのペースで実習を進めるという発展コースのみを選んだ(発展コース:n=25)。午前か午後、または1日目か2日目に基礎コースを選んだ参加者が9名おり、この9人を

表 1-2 基礎コース選択者 (n = 9) の属性

| 性別 (人) | 男:7, 女:2 |
|--------------------|-----------------|
| 年齢 (mean ± SD) | 24.3 ± 2.67 |
| 理学療法士(人) | 8 |
| 作業療法士(人) | 2 |
| 精神保健福祉士 | 0 |
| 経験年数(mean ± SD) | 1.63 ± 1.65 |
| 週単位の患者数(mean ± SD) | 38.7 ± 25.0 |
| 講習会参加数(mean ± SD) | 2.0 ± 0.94 |

「基礎コース」群として、「発展コース」との比較 のために用いた。このうちすべて基礎コースを選 んだ参加者は1名(2日目に参加)のみであった。

基礎コースを選択した参加者の属性を表 1-2 にまとめた。従来型のコース(発展コース)を選択した参加者(表 1-3)と比べ平均の年齢、臨床経験年数、週単位の担当患者数すべてにおいて基礎コースを選択した者の方が低い傾向が見られた(年齢:p=0.089, 臨床経験数:p=0.019, 患者数:p=0.069)。

表 1-3 発展コース選択者 (n = 25) の属性

| 性別 (人) | 男:21, 女:4 |
|--------------------|------------------|
| 年齢 (mean ± SD) | 26.88 ± 5.04 |
| 理学療法士(人) | 18 |
| 作業療法士(人) | 5 |
| 精神保健福祉士 | 1 |
| 経験年数(mean ± SD) | 4.23 ± 4.8 |
| 週単位の患者数(mean ± SD) | 61.14 ± 35.69 |
| 講習会参加数(mean ± SD) | 4.3 ± 6.26 |

2. 各指標における2018年度と2017年度と の比較

「人体標本を使った解剖学実習の必要性について(必要度)」、「目的の達成度(達成度)」、「スタッフの対応(指導法への満足度)」、「プログラムについて(プログラムへの満足度)」では、VASを用いて参加者の評価を数値化した。その数値を基に、参加者全体群・臨床経験4年未満群・臨床経験4年以上群において上述の4つの指標を昨年度のものと比較した(表2-1、表2-2、表2-3)。

「必要度」については参加希望者からの回答であるため、予想通り高い数値となり、参加者全体、臨床経験の多い少ない群を問わず、2018年度と2017年度との間に違いは認められなかった。また「達成度」についても、どの群においても2018年度と2017年度参加者間に違いは認められなかった。

一方「指導法への満足度」は、全体群で2018 年度は2017年度に比べ有意に高くなっていた(p < 0.01、図1-1)。臨床経験4年未満群の参加者に おいても、今年度の方が有意に高くなった(p <

表2. 「必要度」「達成度」・「指導法への満足度」・「プログラムへの満足度」の2018年度と2017年度の比較 表2-1 参加者全体における2018年度と2017年度の比較

| | 必要度 | 達成度 | p値 | 指導法満足度 | p値 | プログラム満足度 | |
|-------------------|-----------------|-------------------|------|------------------|--------|----------------|------|
| | 中央値(25%, 75%値) | 中央値(25%, 75%値) | | 中央値(25%, 75%値) | p但 | 中央値(25%, 75%値) | p値 |
| 2017年 (n = 33) | 100 (86, 100) | 75.5 (68.8, 88.5) | 0.74 | 91.5 (77.5, 100) | < 0.01 | 92.5 (76, 100) | 0.07 |
| 2018年 (n = 35) | 100 (87.3, 100) | 80 (68, 89) | 0.74 | 100 (91, 100) | < 0.01 | 100 (90, 100) | 0.07 |

表2-2 臨床経験4年未満の参加者における2018年度と2017年度の比較

| | 必要度 | p値 | 達成度 | /± | 指導法満足度 | p値 | プログラム満足度 | p値 |
|-------------------|----------------|------|-----------------|------|-----------------|--------|-----------------|------|
| | 中央値(25%, 75%値) | p旭 | 中央値(25%, 75%値) | p値 | 中央値(25%,75%値) | | 中央値(25%, 75%値) | |
| 2017年 (n = 17) | 87 (78 100) | 0.10 | 75 (64, 86) | 0.40 | 81 (71, 92) | . 0.01 | 89 (67, 98) | 0.01 |
| 2018年 (n = 24) | 97 (87, 100) | 0.19 | 80 (67.5, 87.5) | 0.49 | 100 (90.5, 100) | < 0.01 | 100 (91.5, 100) | 0.01 |

表2-3 臨床経験4年以上の参加者における「2018年度と2017年度の比較

| | 必要度 | p値 | 達成度 | p値 | 指導法満足度 | /::: | プログラム満足度 | /::: |
|-------------------|-----------------|-----|-------------------|------|-----------------|------|------------------|------|
| | 中央値 (25%, 75%値) | | 中央値(25%, 75%値) | | 中央値(25%, 75%値) | p値 | 中央値(25%, 75%値) | p値 |
| 2017年 (n = 16) | 100 (98.8, 100) | | 81 (71.5, 89) | 1.00 | 100 (92.3, 100) | 0.70 | 98.5 (90.5, 100) | 0.07 |
| 2018年 (n = 11) | 100 (93.5, 100) | .90 | 77.5 (68.5, 91.8) | 1.00 | 100 (90.3, 100) | 0.70 | 100 (83, 100) | 0.87 |

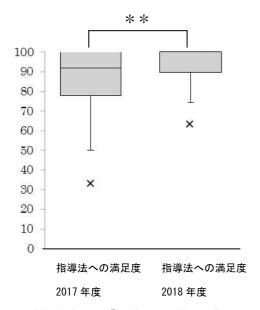


図 1-1 参加者全体の「指導法への満足度」 2017年度 (n = 33) と 2018年度 (n = 35) の評価に 見られた違い (中央値及び 25 %,75 % タイル値) ** p < 0.01

0.01, 図1-2)。なお, 4年以上群では差が見られ なかった。

また「プログラムへの満足度」では、全体群で 2018年度の評価に高い傾向が見られ(p=0.065、図 1-3)、臨床経験 4年未満群でも、2018年度の ほうが有意に高くなった(p=0.012、図 1-4)。

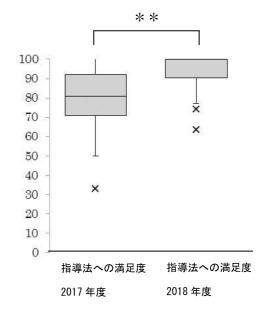


図1-2 臨床経験4年未満の参加者の「指導法への満足度」 2017年度 (n = 17) と2018年度 (n = 24) の評価に 見られた違い

(中央値及び25%,75%タイル値) **p<0.01

3. 各指標における「基礎コース」選択群と「発展コース」選択群の比較

表3に、各指標の中央値及び25%値、75%値とp値(マン・ホイットニーのU検定)をまとめた。「達成度」において、「基礎コース」選択群の

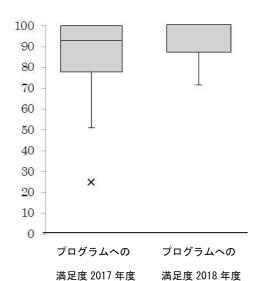


図1-3 参加者全体の「プログラムへの満足度」 2017年度(n = 33)と2018年度(n = 35)の評価の 比較

(中央値及び25%,75%タイル値)

方が「発展コース」選択群よりも高い傾向が見られた (p = 0.066, 図2)。

4. ニーズを把握するための具体的選択肢の結果 について

昨年(2017年)度の質問紙⁸⁾の自由記述部分の回答に見られた感想・意見を基に、ニーズを量的に把握するため具体的選択肢を設け(資料1)、複数選択可能として選択してもらった。

1) 本講習会に対する目的

「設問3」は本講習会に対する目的についてであるが、選択肢の結果を図3-1、3-2にまとめた。a-fは、臨床経験4年未満群で選択された数の多い選択肢の順番にアルファベットを割り当てた。すなわち以下の通りである。

a:基本的な運動器の構造

b: 基本の結合組織の構造

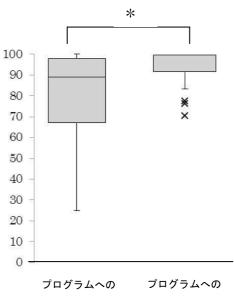
c: 基本的な臓器の構造・配置

d:基本的な脈管の構造・走行

e:傷害に関連する運動器の構造

f: 傷害に関連する構造

以上から、臨床経験年数「4年未満」群・「4年 以上」群、「基礎コース選択」群・「発展コース選択」 群すべてにおいて、「基本的な運動器の構造」を 理解したいというニーズが最も高く、二番目は「基



満足度 2017 年度 満足度 2018 年度

図1-4 臨床経験4年未満の参加者の「プログラムへの満足度」 2017年度 (n = 17) と 2018年度 (n = 24) の評価に 見られた違い

(中央値及び25%, 75% タイル値) * p < 0.05

本的な結合組織の構造」を理解したいというニーズであった。三番目のニーズは各群により異なり、臨床経験4年未満群では「基本的な臓器の構造」、臨床経験4年以上群と発展コース群では「傷害に関連する運動器の構造」、基礎コース群では、「基本的な脈管の構造・走行」となった。

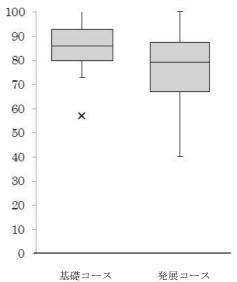


図2 2018年度 基礎コース (n = 9)、発展コース (n = 25) 選択者の

「達成度」に見られた評価の比較 (中央値及び25 %,75 % タイル値)

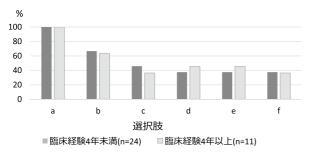


図3-1 臨床経験年数別本講習会に対する目的

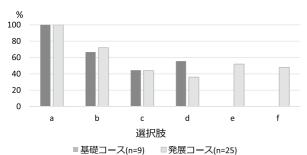


図3-2 選択コース別本講習会に対する目的

図3-1,3-2 における 回答選択肢(a~f)は以下 の通り

- a. 基本的な運動器の構造
- b. 基本の結合組織の構造
- c. 基本的な臓器の構造·配置
- d. 基本的な脈管の構造·走行
- e. 傷害に関連する運動器の構造
- f. 傷害に関連する構造(走行·配置)

また、基礎コースを選んだ群では「傷害に関連 する」事項は選択されなかった。

2) 達成できなかったと思う場合の理由

「設問5」は講習会を終えて「達成できなかった」と思った場合の理由である(図4-1,4-2)。a-dは、臨床経験4年未満群で選択された数の多い選択肢の順番にアルファベットを割り当てた。すなわち以下の通りである。

a:準備すべき知識が足りなかった

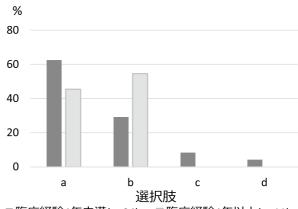
b:確認したい課題が多い

c: 質問する機会が少なかった

d:標本が、わかり難かった

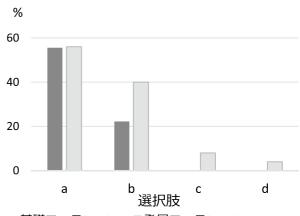
この設問の解答については、それぞれの群で違いが見られた。

選択された項目が少ない順に,基礎コース群(2項目), 臨床経験4年以上群(3項目),発展コース群(4項目),臨床経験4年未満群(5項目)となっ



■臨床経験4年未満(n=24) □臨床経験4年以上(n=11)

図4-1 臨床経験年数別講習目的が達成できなかった と思う理由



■基礎コース(n=9) □発展コース(n=25)

図4-2 選択コース別講習目的が達成できなかったと 思う理由

図 4-1,4-2 における 回答選択肢 (a ~ d) は以下 の通り

- a. 準備すべき知識が足りなかった
- b. 確認したい課題が多い
- c. 質問する機会が少なかった
- d. 標本がわかり難かった

た。臨床経験4年以上群でのみ「確認したい課題 が多い」が最も多く選択され、他群では「準備す べき知識が足りなかった」が多く選択された。

3) 指導法・プログラムへの要望

「設問8」は指導法・プログラムへの要望についてであるが、図5-1、5-2のような結果であった。 a-eは、臨床経験4年未満群で選択された数の多い選択肢の順番にアルファベットを割り当てた。 すなわち以下の通りである。

a:もっと臨床的な講義を聴きたい

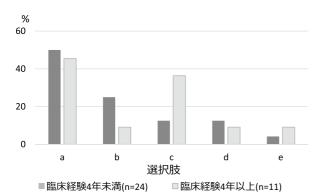


図5-1 臨床経験年数別指導方法・プログラムへの要望

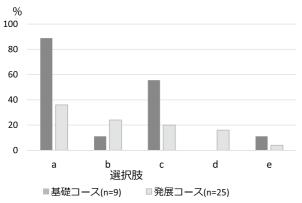


図5-2 選択コース別指導方法・プログラムへの要望

図 5-1,5-2 における 回答選択肢 $(a \sim e)$ は以下 の通り

- a. もっと臨床的な講義が聞きたい
- b. もっと基礎的な講義が聞きたい
- c. 最初から解剖する機会がほしい
- d. 時間が足りない
- e. さらに丁寧に説明してほしい

b:もっと基礎的な講義を聴きたい

c:時間が足りない

d:最初から解剖する機会が欲しい

e: さらに丁寧に説明してほしい

この設問では、各群ともに「もっと臨床的な講義を聴きたい」が最も選択され、臨床経験4年未満群と発展コース群は「もっと基礎的な講義を聴きたい」を二番目に多く選択した。また、「最初から解剖する機会が欲しい」も多く選択された。

Ⅳ. 考察

人体標本を使う解剖学実習については、わが国では死体解剖保存法¹¹⁾ により厳しく制限されており、本学のような、医学部・歯学部を持たない

医療系大学が単独で行うことは現時点では不可能 である。このため、本学の「医療専門家のための 解剖実習セミナー」は、山梨大学医学部の協力を 得て、開催されてきた。

これまで本セミナーへの参加希望者は多く、2014年から2016年まで、毎年61名から89名の参加があった $^{4),5),6),7)$ 。こうした現状は、医療系教育機関において「人体を用いた解剖実習の必要性は高い」というアンケート結果 $^{10)}$ や、他の文献 $^{1),2)}$ からも理解することができる。

一方,昨年度から本セミナーは健康科学大学の卒後研修プログラムを兼ねることとなったため、原則として健康科学大学の卒業生ならびに大学関係施設に所属する医療専門家のみを対象に開催されるようになった⁸⁾。昨年度の研究結果⁸⁾から、特に臨床経験の少ない参加者に対して改善すべき点(指導法及びプログラム)のあることがわかったので、今回新たに基礎コースを設定し、その効果の評価も試みた。

1. 参加者の属性について

1) 参加者全体の属性

参加した医療関連職種者35名の内訳は、理学療法士:27名,作業療法士:7名,精神保健福祉士:1名で,前回のセミナー参加者33名(理学療法士:29名,作業療法士:4名)8)とほぼ同様の構成となった。理学療法士が主体である傾向は同じで、その需要の高さは、医学部を持つ他大学で「理学療法士のための卒後解剖学標本示説研修」が強い希望で行われている9)ことからも理解できる。一方、2年目となり、本大学の卒後研修プログラムが卒業生に多少浸透してきたことが作業療法士の参加の微増の一因と考えている。

参加者の年齢(平均26.14 ± 2.12歳, 20代は 全参加者の74.3%)や臨床経験年数(平均3.51 ± 3.48年)も昨年度(20代が84.8%, 臨床経験 年数平均は4.74 ± 3.99年)とほぼ同様であった。 沖山³⁾は、「本病院では若い理学療法士が増え、 卒後3年以内の理学療法士が38.5%を占めてい る」と報告し、若い臨床家に対する卒後教育の必 要性を指摘した。また昨年度我々は、臨床経験が 比較的少ない集団を臨床経験4年未満群として, 臨床経験4年以上群との2群の比較を行った⁸⁾。 このため,本年度も同様に臨床経験4年未満群と 4年以上群の2群に分けたところ,4年以上群が 11名,4年未満群は24名であり,昨年同様経験 年数の少ない参加者が多く,本セミナーにおいて も若い臨床家への指導が重点課題になっているこ とがわかった。

2) 選択したコース (基礎コースまたは,発展コース) による属性の違い

従来の方法、すなわち参加者自らの課題を決め て自らのペースで実習を進める方法(発展コー ス) に加えて、基礎コース(主催者が実習対象を 指定して解説後、参加者が確認する)を設けた。 今回、基礎コースを選択する参加者は主催者の予 想に反し少なく、全参加者35名のうち、9名のみ であった(1名はこの項目の回答なし)。基礎コー スで行う実習内容について、参加者に事前に十分 適切に伝えられなかったこと、また内容が参加者 の希望に合致しなかったことなどが、選択者が少 なかった理由と推察される。一方、9名のうち8 名は臨床経験4年未満であったこと、さらに基礎 コースを選択した参加者の平均の年齢. 臨床経験 年数. 週単位の担当患者数も. 発展コースより低 い傾向が見られ、今後も若い集団が多く参加して くることが予想されることから、どのような基礎 コースを設定し、周知していくかが重要になるも のと考えられる。すなわち, 事前連絡方法を工夫 し、大学卒業後間もない医療従事者にとって有意 義な実習となるコース設定を検討していく必要が ある。

2. 各指標における2018年度と2017年度と

の比較

「人体標本を使った解剖学実習の必要性について(必要度)」、「目的の達成度(達成度)」、「スタッフの対応(指導法への満足度)」、「プログラムについて(プログラムへの満足度)」の4つの指標について、今回(2018年度)の数値と2017年度の数値の比較を行ったところ、「必要度」・「達成度」については参加者全体群・臨床経験4年未満群・臨床経験4年以上群いずれにおいても有意差は認められなかった(表2-1・表2-2・表2-3)。「必要度」については、ほとんどの参加者は本セミナーに希望して参加したため、今回も前回もすべての調査対象群で高い数値になっている。

一方,「指導法への満足度」については、参加者全体および臨床経験4年未満群で有意に点数が上がり,「プログラムへの満足度」でも、臨床経験4年未満群で有意に点数があがっていた(表2-1,表2-2,図1)。この二つの「満足度」の改善は、参加者全員が受講する2回の講義を担当した教員の努力よるところが大きい。また、今年度新たに設定し、臨床経験4年未満群24名中の9名が参加した基礎コースの意義は確かにあったと言えよう。

3. 各指標における「基礎コース」選択群と「発展コース」選択群の比較

基礎コース選択者は上述の通り9名と少なかった。しかし、発展コースのみを選択した参加者に比べ、「達成度」の点数が高い傾向が見られた(表3)。また、後に述べる「達成できなかった理由」において、基礎コース選択者には「質問する機会が少なかった」や「標本がわかり難かった」を選んだものはいなかったことが、この達成度の高さを裏付けている。さらに「指導方法・プログラム

表3 「必要度」・「達成度」、「指導法への満足度」・「プログラムへの満足度」における 「基礎コース」選択群と「発展コース」選択群の比較

| | 必要度 pf | 値 | 達成度 | p値 | 指導法満足度 | p値 | プログラム満足度 | p値 |
|---------------------|------------------|----|-------------------|------|---------------|------|-----------------|------|
| | 中央値(25%,75%値) | | 中央値(25%,75%値) | | 中央値(25%,75%値) | | 中央値(25%,75%値) | |
| 「基礎コース」 (n = 9) | 97.5 (92.3, 100) | 73 | 87.5 (78.3, 94.8) | 0.07 | 100 (95, 100) | | 98 (93.8, 100) | 0.00 |
| 「発展コース」 (n = 24) | 100 (87.8, 100) | /3 | 79 (67.5, 87.5) | | 100 (90, 100) | 0.62 | 100 (87.5, 100) | 0.98 |

への要望」で、「基礎的な講義を聴きたい」を選択した者は基礎コースでは1名のみで、基礎的知識についての達成感があったものと推察される。一方、基礎コース選択者9名うちの8名が「もっと臨床的な講義を聴きたい」を選択しており、来年度は基礎コースの実習に傷害や疾病に関係する内容など臨床的な要素も取り入れる工夫をする必要があろう。

4. ニーズを把握するための具体的選択肢の結果 について

1) 本講習会に対する目的

参加者全員が「基本的な運動器の構造」を選択しており、臨床経験の長短を問わず、理学療法・作業療法の分野で人体の構造について考える際に「基本的な運動器の構造」が大事な項目であることが確認できた。また、全員が二番目に挙げていた「結合組織の構造」は、筋膜や靭帯などが含まれるが、運動器の障害を考える上で重要な項目であり、臨床に入ってすぐにその必要性が実感されることが推察できる。さらに、臨床経験4年以上群で多く選択された「傷害に関連する…」は正に臨床経験を積むにつれ遭遇パターンが増え、課題になっていくものと考えられる。

2) 達成できなかったと思う場合の理由

臨床経験4年以上群で「確認したい課題が多い」が多く選択されたのに対し、臨床経験4年未満群や、基礎コース群では「準備すべき知識が足りない」が選択されていた。臨床経験を重ねるにつれ、人体の構造や障害に対する知識が増えると同時に、疑問や解決すべき課題が具体的になってくることが理由と考えられる。

「質問する機会が少なかった」、「標本が分かり難かった」を選択した参加者3名はいずれも臨床経験4年未満で、発展コースに参加しており、本セミナー自体の目的や構成が伝わっていなかった可能性がある。

3) 指導法・プログラムへの要望 各群の解答で「もっと臨床的な講義を聴きたい」

が最も多く選択された。本セミナーに対しての参加者からの強い要望と受け止め、今後のセミナーで生かしていく必要がある。ただし、発展コース群では、どの選択肢も数は少なく(表5-2)、今回に近い形が望まれている可能性もある。臨床経験4年未満群と発展コース群で二番目に多く選択された「基礎的な講義を聴きたい」という要望については、基礎コース選択群ではこれを要望したものは少なかったという事実から、臨床経験の少ない参加者に対しては、その内容を積極的に伝え、基礎コースを勧めることも一つの対応策と考えられる。

V. 結語

本年度のセミナー実施前に行った工夫は、一定の効果があり、特に経験年数の少ない群での満足度を上げることができた。来年度においても、実習に伴う基礎的で有効な講習を工夫していきたい。また「基礎コース」の内容については、あらかじめ十分に周知し、参加者が必要に応じて「発展コース」から移動でき、柔軟な質問機会が得られるよう、設定方法にさらなる工夫を重ねていきたい。さらに「臨床的な講義」の要望については、解剖実習セミナーの講義に組み込むか、または別にセミナーの機会を設けるなどを検討する必要があろう。

VI. 文献

- 1) 穴原 玲子, 川城 由紀子, 松野 義晴, 森 千里:理学療法士養成課程学生の解剖学に対する意識変化について. 解剖学雑誌 Vol.83 (3), 81-83, 2008
- 2) 糸数 昌史, 久保 晃, 谷口 敬道, 小阪 淳:バーチャル教材を用いた解剖学演習後の学生の解剖学への興味と苦手意識の変化. 理学療法科学 Vol.31 (5), 715-717, 2016
- 3) 沖山勉:卒後教育・管理の現状と展望 当院における 新人教育プログラムの紹介と職員管理について. 理 学療法学 Vol.42(1), 149, 2015.
- 4) 坂本宏史,野瀬朋宏,成 昌燮,河戸誠司,川手豊子: 医療従事者における「人体標本を 用いた実習の必要 性」についての調査.健康科学大学紀要 Vol.10,47-57,2014.
- 5) 坂本宏史, 川手豊子, 関口賢人, 成 昌燮: 医療従事者における「人体標本を用いた実習の必要性」につ

- いての調査 2014年度. 健康科学大学紀要 Vol.11, 83-93, 2015.
- 6) 坂本宏史,川手豊子,志茂 聡,関口賢人,成昌燮: 医療従事者における「人体標本を用いた実習の必要 性」についての調査 2015 年度.健康科学大学紀要 Vol.12, 25-35, 2016.
- 7) 坂本宏史、川手豊子、志茂 聡、関口賢人、成 昌燮: 医療従事者における「人体標本を用いた実習の必要 性」についての調査 2016年度. 健康科学大学紀要 Vol.13. 83-95. 2017.
- 8) 坂本宏史, 志茂 聡, 関口賢人, 成 昌燮, 川手豊子: 医療従事者における「人体標本を用いた実習」につ いての調査報告(2017)年度一臨床経験年数の長短 によるニーズの違い一. 健康科学大学紀要Vol.14, 95-111, 2018.
- 9) 澤口朗, 豊嶋典世, 日野真一郎, 高橋伸育:理学療法士の技術力向上を目的とした卒後解剖学標本示説研修の新たな展開. 理学療法学Vol.38 (8), 576-577, 2011.
- 10) 日本理学療法士学会. 解剖学実習検討ワーキンググループ: 人体解剖学実習に関するアンケート結果. www.japanpt.or.jp/upload/japanpt/obj/files/chosa/zintaikabo_Q_2017.pdf (最終閲覧日2018年10月30日)
- 11) 死体解剖保存法(昭和24年法律第204号). http://elaws.e-gov.go.jp/search/elawsSearch/elaws_search/lsg0500/detail?lawId=324AC0000000204_20160401_426AC0000000042&openerCode=1(最終閲覧日2018年10月30日)